

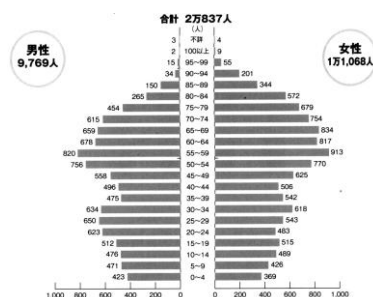
モデル事業名	社員食堂でつながる循環の輪 ―都市と農村のコミュニティ創造構想―
活動団体名	築上町有機液肥固形堆肥利用者協議会
ホームページ	協議会のホームページなし。以下の町役場サイトに関連ページあり。 http://www.town.chikujō.fukuoka.jp/bunnyabetsu/jyunkan/top.html
所属／担当者名	事務局：辻林 英高
連絡先	メール： tuji@bd5.so-net.ne.jp 携帯：090-9721-7372
活動地域	福岡県築上町、行橋市、北九州市

● 活動地域の概要

- ・ 総人口は20,591人、8,985世帯（H21.11末現在）、うち60歳以上は7千人強で、全町民に占める割合は34パーセントと1/3を超えている。高齢化が非常に進んでいる地域である。
- ・ 労働人口の減少に加え、第一次産業から第二、三次産業への移行の傾向が強い。
- ・ 町の総耕地面積は約200,000aのうち耕作放棄面積は9,154a（耕地面積の5%程度）だが、現在の担い手は60代以上の高齢者が非常に多く、この先、農業後継者が出てこない場合、一気に耕作放棄地が増加し地域の農業が崩壊する危険がある。



【位置図】



【高齢化が進む人口比率】

● 活動地域の課題

- ◇ 循環農業（築上町の唯一の強み）を通じた地域の活性化
- ◇ 工業、商業分野との結びつきの強化
- ◇ 若者または退職者の「ターン等」による人材確保

● 活動の内容

・平成20年度

平成20年度事業では、農家サイドから企業サイドへのアンケートや個別面談（社員食堂アンケート調査・ヒアリング、対象企業との懇話会、旬暦の導入アシスト、事業紹介DVD作成等の予備的アプローチを行った。



企業との懇話会

・平成21年度

社員食堂との循環事業（生ごみ収集や農産物販売）のためには、企業との結びつきをより強固にする必要がある。企業従業員に「築上町の米や野菜を食べたい」と言ってもらえるような工夫が必要である。そこで、今年度は前年度のアンケートで要望が多かった農業体験を実施し、双方の信頼関係を構築する。

- 【活動1】 田の草取り体験
- 【活動2】 稲刈り体験
- 【活動3】 農業体験収穫物の社員食堂での利用

● 活動の成果

・平成20年度

- ✓ 企業との懇話会やヒアリングを経て、社員食堂の実態が把握できた。
- ✓ 企業の社員食堂について、会社によって食への意識や廃棄物循環、地域農業への関心の差があることを確認できた。全体的に生ゴミ等の循環利用の実施率が低いことから、今後、当協議会と循環事業へ展開できる可能性が高いことがわかった。
- ✓ 企業が農村に求めているものがある程度わかった。
- ✓ なにより当協議会の活動を知ってもらえる機会となり、同時に企業との人脈ができた。



アンケート等をまとめた「冊子」と「概要版」



液肥循環農業紹介 DVD

・平成21年度

(1) 田の草取り体験

内容：田んぼの生き物さがし、田の草車で除草、循環農畜産物試食会

概要：平成21年7月19日、参加人数20名、田んぼ面積約30アール、当日の天候曇り

(2) 稲刈り体験

内容：稲刈り、循環農畜産物試食会、栗拾い

概要：平成21年9月5日、参加人数73名、田んぼ面積約30アール、当日の天候晴れ

(3) 農業体験収穫物の社員食堂での利用

内容：収穫した米(600kg)の社員食堂での利用

概要：平成22年2月1または8日から2週間実施



田んぼの生き物探し



田の草取り



稲刈り

● 今後の課題及び展望

課題

- ・ 体験事業への複数企業の同時参加は難しいかもしれない(家族的な雰囲気を楽しみたい等の理由)。
- ・ 農業体験事業では農作物の栽培条件等により実施日程がある程度固定されてしまう(雨天などでも延期ができない)。
- ・ 協議会内において様々な企画や企業との交渉、調整をする人材不足。農業体験そのものの準備作業や、参加者(子ども含む)への接し方などは現状のままでも問題ない。
- ・ 平成20年度当初は築上町役場では“生ごみの液肥化”を掲げていたが、現在は当事業実現への動きが非常に鈍い。このままでは仮に企業から生ごみを収集しても、液肥化し循環利用することが困難。

展望

- ・ 今回の活動の結果、一部企業とは非常に緊密な関係を築くことができた。この企業との活動を広げ“成功事例”として他の企業へもアプローチしたい。
- ・ 我が町にはこれといった産業もなく、今後も循環農業を目玉にするしか生き残る道はないと思われる。そうした中で、行政がその循環事業に前向きではない現状をなんとか打破していきたい。